

「Eudora Weltyの語り——*The Ponder Heart*管見——」

(*E. Welty's Narrative Voices in The Ponder Heart*)

太田直子

I

Eudora Weltyの*The Ponder Heart*は、1953年New Yorkで発表され、翌54年単行本で出版された。ClayにあるBeulah Hotel¹の女主人のEdna Earle Ponder²が、車の故障の為にそのホテルに立ち寄った客を相手に話をするという設定で書き始められている。“born storytellers”³とRuth KieftがいうEdnaの語りは、“comic monologue”または、“dramatic monologue”⁴といわれ、この物語のもっとも注目すべき点である。彼女の話し相手がどういう人物なのかは明らかにされていないが、その話ぶりから相手が女性であり、彼女はこの訪問者の女性を自分の叔父Danielの三番目の妻にと考えているという批評もあるが、⁵いずれにしろEdnaは、この聞き手を捕まえて、“And listen; if you read, you’ll put your eyes out. Let’s just talk.”⁶と一方的にPonder家におこった事件を話し始める。

Weltyは、“We see everything through her.”と*The Ponder Heart*の中のEdnaの重要性を認め、さらに“*What we are interested in is how she looks at things.*”⁷と述べていることからわかるように、この小説の中でおこる事件は、Ednaというプリズムを通して表現され、それ故、読者はそのプリズムを通してしか物語に接することができないのである。彼女の存在の重要性と多様性を認識することは、すなわち光を受けとめたプリズムがどのようにその光を反射させ、または吸収していくのかはもちろん、プリズム自体の特性を理解しなくてはいけない。小論では、Ednaの価値判断、人物評価、批評こそがプリズムの特性と考え、物語の展開に従って、彼女の語りの特異性を考察したい。さらに同じ南部の作家であるWilliam Faulknerの*The Sound and the Fury*の語りと比較しながら、American Humorの傑作といわれる*The Ponder Heart*の中に見られる喜劇性について考えていきたい。

II

Ednaについて、Weltyはインタビューに答えて次のように述べている。

Well, Miss Edna Earle Ponder is a spinster who runs a hotel called the Beulah Hotel in Clay, Mississippi, a small courthouse town. . . . It's where all the drummers, the travelling salesmen, came, so really it is the center of life. She runs this, but what she mainly wants to do in life is take care of her uncle, Uncle Daniel Ponder. . . . What he wants to do is give them everything. He wants to give away everything. She knows that he must be protected against himself.⁸

ホテルを切り盛りしながら、叔父の面倒をみる未婚女性というこの特殊な状況を、Welty自身も強調していることがわかるが、作品の中でもEdna自身に次のように語らせ、この状況を肯定的に固定させている。

My papa was Grandpa's oldest child and Uncle Daniel was Grandpa's baby. They had him late—mighty late. They used to let him skate on the dining room table. So that put Uncle Daniel and me pretty close together—we liked-to caught up with each other. I did pass him in the seventh grade. and hated to do it, but I was liable to have passed anybody. People told me I ought to have been the *teacher*.

It's always taken a lot out of me, being smart. (9—10)

頭が良く、祖父の意志を引き継げるPonder家最後の一人としての自負が、作品の至る所に見られ、その自身ゆえに叔父の保護を自分の生活の中心におき、彼の人生さえも自分の意のままに導こうとするのである。

Ednaの特異性に加えて、この物語の喜劇性をさらに強めるように叔父Danielの異常とも思える人となり、彼女の語りによって明らかになっていく。

My Uncle Daniel's just like your uncle, if you've got one—only he has one weakness. He loves society and he gets carried away. . . . All he might do is forget tomorrow what he gave you today, and give it to you all over again. Sweetest disposition in the world. . . .

Things I could think of without being asked that he's given away would be—a string of hams, a fine suit of clothes, a white—face heifer calf, two trips to Memphis, pair of fantail pigeons, fine Shetland pony. . . . cow pasture during drouth, innumerable fresh

eggs, a pick-up truck—even his own cemetery lot; but they couldn't accept it. And I'm not counting this week. He's been a general favorite all-these years. (7-8)

出会った人になんでも与えてしまい、自分の話の聞き手を常に探し求めて毎日を過ごしているDanielに対して、Ednaとその祖父は、Ponder家の財産をDanielの手の届かないところに保存し、彼の生活を導くことに奔走する。

“Edna Earle, I've been debating, and I've just come to a conclusion.”とある朝、祖父はEdnaに“I'm going to fork up a good wife for him. And you put your mind on who.”(24)と協力を求めた。祖父の意図に従いEdnaは聖歌隊で歌うTeacake Mageeを選び、二人はそれに従い結婚した。結婚することはどんな場合でも性格の弱さの現れであると考えている祖父と、Springerというそれらしき男性が身近にいるにもかかわらず結婚できる気配さえもないEdnaが勧める結婚というだけでも、なにか滑稽なものが感じられる。⁹

一回目の結婚は、結局失敗に終わり、祖父は次の手段として、Danielを精神病院へ送り込もうと画策する。一方、精神病院に送られたDanielは、病院から気軽に抜け出し、祖父の意図する結果には至らなかった。逆にDanielは、二人目の妻を見つけることで、祖父に思わぬ逆襲をする事になる。“yellow fluffy hair.”(29)をしたBonnie Dee Peacockに、Danielは次のように求婚する。“I've got a great big house standing empty, and my father's Studebaker. Come on——marry me.”(30)このDanielの求婚は、作品の中で一貫して変化することのないDanielの性格を象徴的に表しているといえよう。そして一連の彼の言動を、聞き手に弁明するかのように話しているEdnaの態度から、彼女のDanielに置かれた視点が高極端に偏ったものであること、そして、それを自分自身の中で肯定していることがわかる。Ednaというプリズムを通ったDanielという光は、“He loved being happy!”(14)そして“He's good as gold,”(16)という普遍の前提のもとで、愛すべき素晴らしい性格だけが強調され、それが聞き手の判断に強い影響を与えている。読者は、この物語の始まりの段階でこのプリズム現象の特徴に気づき、ついでDanielの二人目の妻の死という事件の信憑性を疑いながら、それに対するEdnaの対応に期待をしつつ、作品のなかに隠された真実への複雑な構造に注目してゆく。

III

Ednaの饒舌は、人物描写においてますます好調になる。

Meantime! Here traipsed into town a little thing from away off down in the country. Near Polk: you wouldn't have ever heard of Polk—I hadn't. Bonnie Dee Peacock. A little thing with yellow,

fluffy hair. (29)

これは、Danielの妻、Bonnie Dee PeacockについてのEdnaの最初の描写である。金髪でどこからみても17歳にしか見えず、ピンクの服をきている田舎娘は、死ぬまで毎日汽車に手を振っているような一族の出身であること、そして自分と比べてみると明らかに、内面、外面ともに成熟の域に達していない女性であるなどと、Bonnieの様子を何度も繰り返し描写し殊更強調していることがわかる。明らかに自分よりも劣る相手と叔父が結婚したこと、それも“試験結婚”であったことに少なからず衝撃をうけるが、このショックで心臓が止まってしまった祖父の死によって、ひとり生き残ったEdnaは叔父とその妻を一人で見守り続けなければならなくなるのである。

五年六ヶ月続いた試験結婚は、Bonnieの“No”という一言で終了する。“The house is almost exactly the same size as the hotel, but it’s a mile easier to run. If you know what you want done, you can just ask in the morning for how many Negroes you want that day,” (54). Ponder家を切り盛りしていくことは、自分のような女性にとっては難しいことではないが、田舎の貧乏な家の娘で黒人の扱いも心得ていないようなBonnieが、南部の裕福な家の女主人になれるはずがない事をEdnaは承知していたし、当然そういう結果になることも期待していたはずである。“I don’t blame Bonnie Dee, don’t blame her for a minute. I could just beat her on the head, that’ all.” (49)と強気な発言をするEdnaは、Bonnie Deeが夢の生活を実現できなかったことは当然で、それに彼女がはじめに気がつけばなにも問題もおこらなかったといわんばかりである。“I don’t really think Uncle Daniel missed Bonnie Dee as much as he thought he did. He had me.” (54) 自己顕示欲の固まりともいえる性格とこのおもいこみに支えられ、さらに強く叔父を守るべき自分の進む道を確認するEdnaではあるが、自分の考えとはちがい叔父がBonnie Deeの帰宅を待っていることを知ると、過保護な母親のごとく叔父の笑顔をとりもどす為だけに自分の意志と異なる行動を起こさなくてはならなくなる。その言動の矛盾に彼女自身も気がついていて、その理論的に立証できない自分の心の内を饒舌に説明するのである。

Well, as I opened the subject by saying when I sat down, I can’t help being smarter than Uncle Daniel. I don’t even try, myself, to make people happy the way they should be: they’re so stubborn. I just try to give them what they think they want. Ask me to do you the most outlandish favor tomorrow, and I’ll do it. Just don’t come running to me afterwards and ask me how come. (57)

Ednaというプリズムは、注がれる光の一つ一つをその中に取り入れ、Danielの為という基準のもと、その光を曲折したり、その光の強さを弱めたり強めたりしながら、そこから新し

い光を放つのである。Bonnie Deeを呼び戻すために、彼女はそのプリズムを巧に利用して、Danielの望みのためについに新聞広告を出すことを決心する。

*Bonnie Dee Ponder, come back to Clay.
 Many are tired of you being away.
 O listen to me, Bonnie Dee Ponder,
 Come back to Clay, or husband will wonder.
 Please to no more wander.
 As of even date, all is forgiven.
 Also, retroactive allowance will be given.
 House from top to bottom now spick and span,
 Come back to Clay the minute you can.
 Signed, Edna Earle Ponder. (58—9)*

「あなたが帰ってきてくれることで、みんなが幸せになれ、あなたが居なければ…」とでも理解できる新聞広告ではあるが、見方を変えれば、「みんなはあなたの帰りを待っている。今までのあなたの数々の未熟な行いは水に流し、小遣いも少しあげましょう。それに私があなたの代わりに指示を与え、家の中もすべて黒人にきれいにさせます。あなたはただ帰ってくるだけでいいのです。もしよければね。」と読みとれる。Ponder家の女主人はこの私Edna Earle Ponderであり、Bonnie Deeはあくまでも叔父の心の回復の為に帰ることだけが必要なのである。そしてその策略にはまったBonnie Deeは、翌朝9時45分に帰ってくる。

帰ってくるとBonnie Deeは、洗濯機を買い、電話を引き、Narcissと「奥様ごっこ」をして暮らし、今度は家からDanielを追い出してしまう。追い出されたDanielは、Beulahホテルにすむことになる。この状況はEdnaにとって喜ぶべき理想的なものであったが、ただ彼の心の内を計ると自分の喜びだけには浸ってられない。Ponderの家に、好き勝手に暮らしているBonnie Dee、そこへ足を踏み入れたくてもできない彼の姿を見るうちに、彼女は一つの策を講じる。そしてそれが殺人事件として発展するのである。

毎週土曜日にお金を届けることをやめれば、きっとBonnie DeeがDanielを家に呼ぶに違いないというEdnaの提案にDanielが賛同する。彼女の思惑どおりBonnie DeeはDanielを呼びつけ、雷雨のなか彼とEdnaが訪問したとたん、Bonnie Deeは死亡する。彼女の死は、名実ともに彼女のPonder家からの抹殺を意味する。Bonnie Deeが死亡したPonder家の大邸宅はその昔、Ednaの祖父母が町から離れた所にあらゆる装飾を施した派手なペンキで塗られた家で、ココナッツを振りまくように避雷針が振りまかれている一風変わった家であった。祖父は電気を命取りと考える人物で、そのおかげでPonder家には電気と名の付くものはなにもおかれてはいなかったのである。Ponder家の極端な電気嫌いという楽しい発想は、Welty自身の少女時代の経験によるものである。¹⁰娘に雷の恐ろしさを常に語っていたWeltyの父に代表

されるようにWelty家は気象に対して敏感な家族であった。Bonnie Deeが雷の鳴る中死亡したという実に希な死因を作品の中で最も深刻な場面に利用したことにおもしろさを感じる。そんな家にBonnie Deeが電話や、洗濯機を取り付けて死ぬ事は、当然の報いであると考えられるように聞き手に認識させ、やはりBonnie DeeはPonder家の女主人にはなれなかったのだと、高らかにEdnaが宣言しているかのようである。

Ponder家の者としてBonnie Deeの最期を毅然として見届ける必要があると感じるEdnaは、いやがるDanielを連れて故郷のPolkでの彼女の葬式に参列する。そしてまた彼女の鋭い観察が始まる。

The funeral was what you'd expect if you'd ever seen Polk—crowded. It was hot as fluzions in that little front room. . . . People, people, people, flowers, flowers, flowers, and the shades hauled down and the electricity burning itself up, and two preachers both red-headed; but mainly I felt there were Peacocks. Mrs. Peacock was big and fat as a row of pigs, and wore tennis shoes to her daughter's funeral—I guess she couldn't help it. I saw right there at the funeral that Bonnie Dee had been the pick. (76—7)

During the service, half the Peacocks—the girls—were still as mice, but the boys, some of them grown men, were all collected out on the porch. Do you know what they did out there, on the other side of the wall from us? Bawled. Howled. Not that they ever did a thing for their sister in life, very likely, or even came to see her, but now they decided to let forth. And do you know all through everything the broom was still standing behind the door in that room? (78)

健全な白人家族とは言いがたい“poor white”の一族の様子を描写し続けることは、すなわち聞き手そして読者にPonder家の優位性と、貧しく卑しく胡散臭いというPeacock家のイメージを植え付けることになる。それは、同じ白人ではあるがこの二つの家族が決して交わることができないというEdnaの自尊心と驕りとも考えられる。こうしたイメージを聞き手に植え付けたのち、EdnaはDanielが殺人罪で告訴されたことを—まさしく信じがたい濡れ衣だといわんばかりに—語る。

IV

裁判でのEdnaの見解は、常に前と同じでPeacock家の滑稽なほど下品で卑しい様子を証言し、すべての自分以外の証言がいかに無意味なものであるかを詳細に述べている。はじめに検死官が証言台に立ち、“And do you know who was called next? Nobody you’d ever hear of in a thousand years.” (89) と陳述し、次にPonder家の農場で働いている黒人のBig Johnが立って、“I’m going to kill you dead, Miss Bonnie Dee, if y’ don’t take m’ back.” (91) という伝言をDanielから100セントもらって伝えたことを証言した。それは金銭がらみでしか物事を覚えられないBig Johnの証言であること、また、こういうDanielの話し方はPonder家の常識であるという理由で、Ednaは彼の言葉には何の信憑性もないことを示し、長年Ponder家で働かせてもらった黒人が、主人に対して不利な証言をする事じたいに不満を述べている。しかし、ここで一つ注目したいのが、彼女のDanielへの不満である。この作品の中でたった一カ所だけのべられるのが次の描写である。

Would you guess, that after all that had been done for him, Uncle Daniel had taken it on himself to send Bonnie Dee *his own message*? That same Saturday I stopped the money, he did it. By word of mouth, of course. And he picked out the slowest, oldest, dirtiest, most brainless old Negro man he could find to send it by. (89)

これは、自分が手を貸したことが無駄になったと、Danielの不甲斐なさをこぼしながら、自分が彼の為に何でもする事ができること、そしてその事を彼自身も充分承知しているというEdnaの自負のあらわれとも考えられる。従って、彼の言動、さらには自分の彼への献身ぶりを彼女は問い直すことはない。逆に、彼の過ちが多ければ多いほど、自分の必要性が高まってくる確信するため、Danielの失言すらそれが彼に対する否定的な批評になることもなく、彼女の彼への責任力の強化につながっていく。

ついに、Ednaは自ら証言台に立ち、DanielのBonnie Deeへのメッセージについての弁明を試みる。

“Why, certainly,” I says. “It was a perfectly normal household. Threats flew all the time. Yes, sir. ‘I’m going to kill you dead——’ The rest of it goes, ‘if you try that one more time.’”

“Have there been instances in your presence when Mr. Daniel Ponder said those very words to Miss Bonnie Dee?”

“Plenty,” I says. “And with no results whatever. Or when she said

it to him either.” (110)

さらに、雷光の中、叔父とBonnie Deeを訪ねるとすでに彼女が死亡していた事、そして叔父が動転して気を失った事、さらに火の玉が家の中を通り過ぎていったことをEdnaは公言した。このEdnaの証言を聞いたDanielは、彼女を“like he never saw me before in his life.” (120) と見つけ、そして今度は自分が証言台に立つと主張した。

Danielの思考、発想は、世間の人々からは信じがたいもので、彼からの視点のみで見た事件の成りゆきは、あまりに信じがたく、事件の真相を明らかにするとはみなされなかった。“He needn’t think I was going to let him tell it now. After guarding him heart and soul a whole week———a whole lifetime!” (139) と堅く信じるEdnaは、話し相手も裁判に立ち合った人々と同様に、Danielの話信じないことを察し、自ら彼女がいう真実、Danielにくすぐられている間のBonnie Deeの死を語るのである。

V

Ednaの証言も、Danielの証言も、とうてい世間の人々を納得させるものではなかった。その上、この裁判におけるすべての証言は、妙に子供っぽい茶番劇のようで、殺人事件の非壮感などは微塵も感じられないのである。そこで、最後に取られた手段は「お金をばらまくこと」であった。

Uncle Daniel stood still a minute on the witness stand. Then he flung both arms wide, and his coat flew open. And there were all his pockets lined and bursting with money. I told you he looked fat. He stepped down to the floor, and out through the railing, and starts up the aisle, and commences handing out big green handfuls as he comes, on both sides. (144)

人にものを与えて毎日を暮らしてきたDanielにとって、自分の面前に立ちだかった困難をさける手段は、やはり人になにかを上げることだと考えた。そして、皮肉にも彼が差し出したその金に人々が群がり、その混乱の中で「無罪」の評決が下される。

このDanielの行為に対して、Ednaは次のように述べている。

And Uncle Daniel had got right back to where he started from. He went from giving away to falling in love, and from falling in love to talking, and from talking to losing what he had, and from losing

what he had to being run off and from being run off straight back to giving away again.

Only it was worse than before, and more public. The worst thing you can give away is money——I learned that, if Uncle Daniel didn't. You and them are both done for then, somehow; you can't go on after it, and still be you and them. Don't ever give me a million dollars! It'll come between us. (148-49)

叔父が最悪の手段を用いたことを認め、お金のせいでそれ以来Ponder家とほかの町の人々との間に亀裂が入ったことを強調し、一方、そしてそれから三日間、この話し相手がホテルに来るまで一人の客も来ていないことを告白するのであるが、このような世間との隔離が深刻な問題であることに気がついている様子は、Ednaの言葉の中には読みとれない。無罪の評決が、金銭をばらまいた事とは直接的な因果関係がないことを自分に納得させながらも、EdnaはPonder家の財力が自分たちを他の町の人たちより卓絶した一族にしているのだという自負心と優越感に固執している。財力と血統は、アメリカ南部家族社会の悲劇の二大要因であると考えられる。

一族の最後の人間としての誇示と自負、加速的に高まるその自意識をもって叔父Danielの保護に生きるという使命感を自らに課した一人の南部女性の人間性を物語の筋とともに考察し、彼女の境遇と性格の特異性をプリズムの特性と考えると、語られている物語にある歪みを認識することができる。その歪みこそが*The Ponder Heart*を一つの寓話にしたて、“*The Ponder Heart* is... a Southern farce——or a tall tale”¹¹といわしめている所以であろう。

VI

*The Ponder Heart*でEdnaがPonder家の心の姿を語るという事に注目すると、同じ南部作家のWilliam Faulknerのfamily sagaの一つ*The Sound and the Fury* (1929)の語りか思い出される。この作品は、四人の語り手がそれぞれ“a story of Caddy”を語るように構成された小説である。一つの話をも四人に語らせたことについて、Faulknerは次のように述べている。

And I tried first to tell it with one brother, and that wasn't enough. That was Section One. I tried with another brother, and that wasn't enough. That was Section Two. I tried the third brother, because Caddy was still to me too beautiful and too moving to reduce her to telling what was going on, that it would be more passionate to see her through somebody else's eyes, I thought. And that failed and I tried myself——the fourth section——to tell what happened, . . .¹²

第一章はCompson家三男Benjyに、第二章は長男Quentin、第三章は次男Jasonに語らせ、それでは語り尽くすことができなくなり第四章、いわゆる“Dilsey Section”がつけ加えられた。Benjy, QuentinそしてJasonの章は、各々物語の筋を追うというよりもその語り手の個性、心情、そしてCaddyへのそれぞれの想いが読者に強く印象づけられるものである。これは、Weltyの*The Ponder Heart*の語りにも共通することが多いが、上記三人の語りに比べて、Ednaの語りには多分な意外性があることがわかる。

“Through the fence, between the curling flower spaces, I could see them hitting.”¹³ という一文で始まる第一章の語り手は、三十三歳になるが三歳程度の知能しか持ち合せていない白痴のBenjyである。この“I”というのがいったい何者であるのかという事は、第一章を読み切ったところでも深い謎のままである。Faulknerは出版にあたり、この章を日付に応じて違う色のインキで印刷したいという希望を持っていたといわれるが、時間観念の欠如と時間という概念を超越した人間が持つ本来の心の叫びをBenjyの意図するままに表現したのである。Benjyにとって“*She smelled like trees.*”と木の香りを持つ姉のCaddyは、母であり、愛の対象であり、心の拠り所であった。三歳の知能しかないBenjyの嗅覚は、他の兄弟とは異なり直感的に動物的本能のもと、変わっていくCaddyの姿を察知している。すべてのものに対してただ“*moaning*”する事しかできないBenjyの「沈黙」の語りは、世の中の時間の流れに左右されることなくいつも自分が「受け入れることのできるもの」という一定の基準に照らし合わせて、それと相いれないものをもって話の展開を示唆するのである。Ednaの饒舌が事件の真相を疑わせるとは反対に、Benjyの沈黙の語りは、読者に真実を語りかけているように感じられる。

第二章のQuentinは、Compson家の没落と妹のvirginityの喪失という二重の責任の重圧に耐えかねて自殺をする。自分と妹、そしてDalton Amesとの三角関係に関する場面でも明らかのように、彼には近親相姦的衝動が確かに存在する。しかし、妹Caddyに対する愛は、Benjyのそれとは異なり、純粹な兄弟愛でもなく、“愛”そのものの概念に対する幻想に他ならない。これは両親特に母親からの愛の欠如によるものである。Quentinは経済的理由から家の牧場を売却して、Havardに遊学させてもらったという良心の呵責、父親Jason Compsonの運命論、誇り高い母親の道徳的、精神的退廃という環境の中で、自分の存在を見失い、妹や家族に対する愛の歪みを修正できぬまま、死と生の間をさまよい悩みつづけるのである。彼は、自分の心の中で曖昧に存在するこの悩みを大きな声で誰かに問いかけることもできず、自問自答を繰り返す中、結局最後は自分自身の存在を美化するために自殺してしまう。いわゆるナルシスト的な彼の語りはすべてを負の方向に導いてしまう。

非常に神経質で繊細なナルシストであるQuentinとは逆に、次男Jasonは、人生の支えを“金”に求めて生きていく、男性経済機構の代表である。彼はわずかな給料の中から貯金をしてMemphisの学校で綿花の選別法を学び、父そして兄の死後、没落した一家の屋台骨を一身に支え、白痴の弟とCaddyの娘Quentinを養っている。Jasonには幻想や愛は存在しない。背

負った荷物の重さ故にその言動も過激である。白人優位の思想をもち、保護すべき人物を抱えていることなどはEdnaとの共通点であるが、彼の語りにはEdnaにある柔軟性がない。彼は、小さいときからポケットに手をつっこんでお金をさわっているほど金銭に執着する人物である。黒人の料理女の給料は未払いの上、姪の養育費をごまかし金を貯めている。しかし結局、姪には\$2840.50の養育費を持ち逃げされ、黒人女にはcotton ledgesとsamplesを持ち逃げされ、実に滑稽な姿をさらす。自分の信じるものに直線的に立ち向かう頑固なDon QuixoteともいえるJasonの姿は、Ednaの姿と重なる部分がみられるが、その頑なさ、失敗した時にEdnaのように気楽に軌道修正や気軽な方向転換を許さない。それは兄Quentinと同様、幼いときからの愛情の欠落によるものである。

結局、三人の兄弟に語らせたものの、FaulknerはCaddyの物語を語り尽くすことができず、黒人の女性使用人という社会的弱者のDilseyにそれを補わせることになった。主人と使用人という限りなく遠い位置にありながら同じ家の中で、それも母親の存在がない一家の母親代わりとして働く彼女は、その視点を常に一定のレベルに保ち、客観的にしかも愛情深く語ることができる唯一の人物である。こうして四人の語り手によってあぶりだしの絵のように浮き上がってくるCaddyの話をも総合して、Compson家におこった現代南部の一家族の悲劇を確認する事ができるのである。

The Ponder Heartの場合、一人の語り手で話が語られるのであるから、多角的視点でもって読者が理解する必要はない。しかし、EdnaはThe Sound and the Furyの四人の語り手とは異なり、至る所に彼女独自の“愛”意識が実存し、彼女自身の見方、判断がその場面ごとに変化してもそれが「叔父のため」という前提のもと強引に軌道修正されてしまう。これこそ語り文学のclichéを修正したEdnaのオリジナリティであるとも言えるかもしれない。

VII

本年1997年、William Faulknerの生誕100周年を記念して、Faulknerの作品の再評価が盛んに行われている。南北戦争後、合衆国から見捨てられお荷物の存在であった南部を、アメリカ人に再びその存在を知らしめたのはFaulknerの文学であることは疑いもない事実である。しかし、グロテスクなほど赤裸々に描かれた腐敗した南部社会の過激で誇張された物語は、南部の実状でも真の文学でもなく、ただ売るためにヤンキーの望む南部社会を書いた為に受け入れられたにすぎないという批評もある。同じ20世紀の南部作家でもWeltyの描く世界はFaulknerのものとは異なる。そのためか彼女はFaulknerが受けたような衝撃的な賞賛をうけることなく、固有の世界の中で小説を書き続けている。それは南部小説という特別な視点から評価され批評の対象となるような作風とはいえないかも知れない。しかしThe Ponder HeartのEdnaは格式と伝統を重んじ、Ponder家を支えながらその一家の存続さえもあやゆくするDanielの存在を肯定的にとらえ、その場に応じて語り、自分の理念の矛盾に気づきながらもそれを最後には正当化してしまう。光をうけたプリズムは、常に明るい方向に

光を屈折していると言えよう。殺人事件にさえ至ったBonnie Deeの死は、その真実を明かされることのないまま、滑稽なものとして扱われ、悲劇の領域に足を踏み入れることなくますますコミカルな世界へと導かれる。Ednaの語りはまさしく、ヤンキーの望む暗い陰湿な南部では決してなく、内から見た真の南部を表現しているとも言えるかもしれない。読者は、*The Sound and the Fury*を読み終えたときの後味の悪さに沈むことなく、Ponder家の物語はEdnaの話術によって笑いを浮かべて読み終えることができると同時に、プリズムの歪みよりEdnaの非社会的な視点と南部白人のもつナルシスト的な思考によって、南部小説の実感を味わうことになる。

Faulknerの死後、様々な作家が南部を描いてきた。彼と同じ町に住み今ベストセラーを出し続けているJohn Grishamは、Faulknerの世界に見られる南部の陰の部分、裁判という公の場所を通して人種問題の真実を新しい視点で描きつつある。Faulknerの南部が北部につくられた虚像であるとするならば、Grishamは虚像の中にある真理を追い求めているといってもいいかもしれない。しかし、Weltyは、Faulknerと同じ時代から今日に至るまでJacksonに静かに生活を続けながら、外からの影響にも屈しない普遍的な南部神話を喜劇で創りあげたといえよう。Ednaの語りはMississippi川のようにくねくねとその流れを何度も変えながらも、Mark Twainのtall taleの流れを汲み、しかも大らかなうなりとなって堂々と流れていく川のようなものであるといえるかもしれない。

註

1. Beulah HotelがMendenhall Hotelをモデルにしたのではないかという問いに対してWeltyは次のように答えている。

“There really isn't any connection except that in *The Ponder Heart* is an imaginary hotel in an imaginary courthouse town. The Mendenhall Hotel could be an example of such a thing, but it was not modelled on it. It was the sort of place that the Beulah Hotel probably would have been in *The Ponder Heart*.”

Peggy Whitman Preshaw(ed.), *More Conversations with Eudora Welty* (Jackson: Univ. of Mississippi, 1996), 133.

2. “Edna Earle was the name of the heroine of a syrupy 19th-century novel called *St.Elmo*.” Peggy W. Preshaw(ed.), *More Conversations with Eudora Welty*, p. 8.
3. Rurh M. Vande Kieft, *Eudora Welty* (New York: Queens College, City Univ. of New York, 1987), 53.
4. *Ibid.*, 54—55.
5. cf. Peter Schmidt, *The Heart of the Story* (Jackson: Univ. Press of Mississippi, 1991), 284.
6. Eudora Welty, *The Ponder Heart* (New York: Harcourt, Brace and Company, 1953), 11.

この作品からの引用及び作品への言及はすべてこの版に基づくものとし、以後引用箇所には括弧内に頁数だけを示す。

7. Peggy Whitman Preshaw(ed.), *Conversations with Eudora Welty* (Jackson: Univ. Press of

Mississippi, 1984), 56.

8. Peggy Whiteman Preshaw(ed.), *More Conversations with Eudora Welty* (Jackson: Univ. Press of Mississippi, 1996), 131.

9. cf. Peggy W. Preshaw, *Eudora Welty-Selected from Eudora Welty: Critical Essays*-(Jackson: Univ. Press of Mississippi, 1983), 82.

“The other notion—that marriage is somehow a betrayal of one’s deepest identity, not only personal identity but one’s essential human identity, that it is better to burn them to marry—is kept well submerged in these novels.”

10. cf. Eudora Welty, *One Writer’s Beginnings* (New York: Warner Books, 1972), 4.

11. Carol S. Manning, *With Ears Opening Like Morning Glories-Eudora Welty and the Love of Storytelling*-(Connecticut: Greenwood Press, 1985), 82.

12. Frederick L. Gwynn and J. L. Blotner, (eds.), *Faulkner in the University* (Charlottesville: The University of Virginia Press, 1959), 1.

13. William Faulkner, *The Sound and the Fury* (Penguin Books, 1964), 11.